



Short ショートコメント

★★★

## わたしのお母さん

2022年／日本映画

配給：東京テアトル／106分

2022（令和4）年11月19日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data 2022-130

監督・脚本：杉田真一  
出演：井上真央／石田えり／  
阿部純子／笠松将／  
橋本一郎／ぎい子／  
瑛蓮／深澤千有紀／  
丸山澪／大崎由利子／  
大島蓉子／宇野祥平

## みどころ

母娘をテーマにした映画は多いが、そこにはさまざまな“切り口”がある。同じ井上真央主演でも『八日目の蝉』（11年）は名作だったが、本作は？ 女、女、男という構成の三人姉弟をシングルマザーが育てれば、普通、長女はしっかり者になるはずだが、本作は全く逆。これは一体なぜ？

起承転結もなく、ことさら筋立てもない本作ラストに発生する事件（？）には少し驚くが、それって一体ナニ？邦画の劣化はここまで進んでいるの…？

———— \* ————— \* ————— \* ————— \* ————— \* ————— \* ————— \* ————— \* ————— \* —————

◆ジア・リン監督の『こんにちは、わたしのお母さん』（21年）は、いかにも中国流の母と娘の愛情を描いたもので、コメディ色とお涙ちょうどいを両立させた名作だった（『シネマ50』192頁）。また、井上真央と永作博美が共演した『八日目の蝉』（『シネマ26』195頁）も、生みの母と育ての母という難しい法的問題をテーマにした「邦画にもこんな名作あり！」と誇れる女たちの物語だった。そんな井上真央が、今回は『釣りバカ日誌』で主人公ハマちゃんの女房役として味のある演技を見せていた石田エリと共に演じた『わたしのお母さん』と題された本作は必見！そう思ったが…。

◆夫に先立たれた妻が、三人の子供を女手一つで育てていくことがどれほど大変か！それは私にはわからないが、三人の子供が女、女、男という構成なら、普通、長女は母親代わりを兼ねてしっかり者になるはずだ。ところが長女・夕子（井上真央）、次女・晶子（阿部純子）、長男・勝（笠松将）の三人姉弟で構成される松田家の長女はそうではなく、なぜか引っ込み思案で、おっとり型。口が達者で、何事も素早い母親・寛子（石田えり）とは正反対の性格だったらしい。そして、そのため、外出しがちで子供たちと向き合う時間を取りれない母親とはうまく付き合えなかつたらしい。

しかして今、夕子も晶子も嫁いでいるため、寛子は長男夫婦と同居していたが、そこはもともと父親の家。したがって寛子が長男夫婦に遠慮する必要はないはずだが、本作は寛

子が揚げ物を放置しながら隣人とおしゃべりしていたためボヤ騒ぎを起こすシークエンスからスタート。家を補修する間、寛子を夕子夫婦が預かることになったのだが・・・。

◆夕子夫婦のマンションにやってきた寛子は、お隣りへの挨拶がしつかりなら、お隣りの小さな子供ともすぐに仲良しに。また、家事全般はなんでもスピード一かつ要領よくこなす寛子は、夕子が畳んだ洗濯物までさっさと自分流に畳みなおしてしまうから、こりや逆に迷惑?その上、夕子の帰りが遅いと、夫の夕食まで作ってくれるから、これも有難迷惑・・・?

夕子が夫の夕食用に買ってきた餃子については、「明日食べればいいでしょ。」の一言で終わりだ。そこで夕子が拗ねていると、寛子からは「私は良かれと思ってやっているよ。なに怒ってるの」とのきついお言葉が。「ああ、これだから私はこの母親は苦手。」夕子はそう言いたいのだが、それを言うことができないのは子供の時と同じ・・・?

◆本作は一言で言えば、「すれ違い、葛藤する娘と母の物語」だが、ストーリー全体に起承転結もなければ、ことさらの事件性もない。新聞紙評では「ことさらに筋立てがない映画に挑戦する。勇気がいる。過激な主題と映像に慣れて、想像力は麻痺し、含みある結末は退屈と拒否される。」と書かれてはいるが、まさにその通りだ。

中国映画の『こんにちは、わたしのお母さん』(21年)はストーリーの奇抜さと共にスピード感があったが、本作にはスピード感もなし。淡々と画面が切り替わっていくだけだから、始まって30分もすれば、いい加減飽きて退屈になってくる。録画している番組なら早送りしたくなるが、それもできないので、あくびしながら観ていると、実家に戻った寛子が静かに息を引き取ったと、ある意味、あっと驚く事件が発生。ここからナニが始まるの?

◆チラシには「大切にしないとき、親なんだから」の文字が躍っているから、ひょっとしてそこから何かの大展開が?と思ったがその後の葬儀シーンも通り一遍の描き方だけ。葬儀をどこかの会館でやるのか、それとも自宅でやるのかは、私にはどうでもいいことで、問題はそんな三人の子供たちは母親の死をそれぞれどう受け止めているの?ということだ。

きっと往年の名監督ならそんな締め方を用意するはずだが、杉田真一監督が描く本作のラストは、葬儀後に出す食事の味がなかなか母親のようにいかない、という晶子の感想に同意する夕子の姿。なるほど、それも一つの結末かもしれないが、近時の邦画のレベルはここまで低下しているの?私はそれを痛感してしまったが、さて、あなたは?